

k-623

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第13集

市内遺跡発掘調査報告書(4)

もと じゅく にし
本宿西遺跡の調査
はん ざい けい
半在家遺跡の調査
じょう す いり
生僧入墳墓群の調査
かわいさん Ⅱ 遺跡の調査 他

1996年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(4)

もと じゆく にし
本宿西遺跡の調査

はんざいけ
半在家遺跡の調査

しようすいり
生僧入墳墓群の調査

河井山Ⅱ遺跡の調査 他

平成8年3月

長井市教育委員会



序

この報告書は、平成7年度に国庫補助を得て実施した市内遺跡発掘調査の結果をまとめたものです。

本市には200箇所あまりの遺跡が登録しておりますが、表面踏査にもとづいたもので開発事業との調整や遺跡台帳整備などさまざまな要因はありますが、毎年行っている市内遺跡発掘調査で少しづつ遺跡の範囲や性格が明らかになってきました。「まさかこんなところに」「なぜこの場所に」と現代文明の名のもとに暮らすわれわれの生活観念からは、とても考えがおよばないところに遺跡の存在や生活の営みを見る事ができます。東五十川の生僧地区は古くから室町時代の宥日上人に関わる言い伝えがあり、このたびの調査で山の中腹から墳墓が見つかり、寺に関する伝承や地名の由来から大規模な墓域の存在が考えられ、昔から聖なる場所として今日に伝わっているようです。また、河井山では山頂一帯から石器が出土し、広範囲な旧石器時代の遺跡が予想されると同時に、河井山全体が旧石器時代・縄文時代・古墳時代・戦国時代の遺跡であることが判明しました。これらの遺跡を詳細に調査すれば長井の歴史に新しい一頁が加わることは言うまでもありません。

ここ数年来、時代の要求に伴い民間サイドによる大規模な開発事業の申請が見られます。現在の文化財保護と開発事業の調整は、行政機関が実施する開発事業を中心に実施してきましたが、ここにきて民間開発と文化財保護の調整は避けは通れない事態となってきております。開発と遺跡保護は背中合わせのものですが、民間の方々にも文化財保護の必要性をご理解いただき、互いに調整をとりながらすめていく所存であります。

最後になりましたが、このたびの調査にご協力いただきました関係各位ならびに悪天候にもかかわらず調査に参加くださいました地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いに存じます。

平成8年3月

長井市教育委員会

教育長 奥 山 晃 二

例　　言

1. 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成7年度以降開発事業との調整並びに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 事業期間は平成7年4月10日から平成8年3月31日までである。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

調査補助員 神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）

調査参加者 青木藤一　荒生小太郎　飯沢字造　飯沢一男　飯沢正吾
牛沢茂　小熊孫助　小口勘市　小間健　小林二雄
小松慎一　今野久美　佐藤勇　佐藤賢一　色摩久之丞
鈴木孝吉　鈴木照雄　鈴木弥五郎　鈴木与右衛門　平博夫
平雄治　高橋紀平　田中八郎　永岡勇　沼沢里吉
沼沢正吉　沼沢与一　松木英蔵　松木六衛　横山吉次
渡部金六

事務局長 渋谷源一郎（長井市教育委員会文化課長）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

事務局員 神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）

事務局員 斎藤さつき（長井市教育委員会文化課）

4. 本調査にあたっては、次の方々にご指導ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化財課、（財）山形県埋蔵文化財センター、致労地区史談会、成田地区、森地区、東五十川地区、河井地区、豊田地区文化振興会、長井市商工観光課・下水道課・農林課、土地開発公社、長井市古代の丘資料館
小松慎一氏、高橋紀平氏

5. 挿図・付図の縮尺はスケールで示した。また、遺物の写真的スケールは5cmを示す。

6. 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当した。拓本は尾形貞夫館長の協力を、挿図・図版の作成は斎藤さつきの補助を得た。

目 次

I. 調査に至るまで	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の方法	1
3. 調査の経過	1
4. 新たな遺跡の発見について	4
II. 開発事業に係る発掘調査	5
1. 岡鼠原地区	5
2. 中宿遺跡	7
3. 本宿西遺跡	9
4. 本宿東遺跡	11
III. 遺跡台帳整備に係る発掘調査	13
5. 半在家遺跡	13
6. 駒木平遺跡	19
7. 生僧入墳墓群	21
8. 森観音堂遺跡	27
9. 河井山遺跡群	29
1) 河井山遺跡群について	29
2) 西前遺跡	31
3) 河井山Ⅱ遺跡	33
報告書抄録	35

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	3
第2図 岡鼠原地区調査概要図	5
第3図 中宿遺跡概要図	7
第4図 本宿西遺跡概要図	9

第5図	本宿東遺跡概要図	11
第6図	半在家遺跡概要図	13
第7図	半在家遺跡土器実測図・拓影図	16
第8図	駒木平遺跡概要図	19
第9図	生僧入墳墓群概要図	21
第10図	生僧入墳墓群調査概要図	23
第11図	生僧入墳墓群調査概要図	24
第12図	森観音堂遺跡概要図	27
第13図	河井山遺跡群概要図	30
第14図	西前遺跡概要図	31
第15図	河井山Ⅱ遺跡概要図	33

図 版 目 次

図版1	新規発見の遺跡・遺物	4
図版2	岡鼠原地区	6
図版3	中宿遺跡	8
図版4	本宿西遺跡	10
図版5	本宿東遺跡	12
図版6	半在家遺跡	14
図版7	半在家遺跡出土遺物	17
図版8	半在家遺跡出土遺物	18
図版9	駒木平遺跡	20
図版10	生僧入墳墓群	22
図版11	タ	25
図版12	タ	26
図版13	森観音堂遺跡	28
図版14	河井山遺跡群遠景	29
図版15	西前遺跡	32
図版16	河井山Ⅱ遺跡	34
付表1	調査一覧表	2
付表2	調査工程表	2

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ約200箇所の遺跡を把握した。しかし近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。そのため開発事業と調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的にした調査である。

また、周知の遺跡は表面踏査で確認したものがほとんどであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにするために試掘調査を行い、遺跡台帳の整備にあたった。

2. 調査の方法

(1) 現地調査

遺跡として登録されていない地域でも、事業実施区域が広範囲におよぶ場合は現地調査を実施し遺跡の有無を確認し、開発事業と遺跡保護の調整にあたった。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が事業実施区域に含まれる場合や、周知の遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図った。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査から推定した遺跡について坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺跡内容の補筆にあたった。

(3) 測量調査

遺跡の現況を明らかにしたり、遺構の形態を明確に示す目的から測量調査を行い、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたると同時に、遺跡台帳の整備の目的から測量調査を行い、遺跡内容の補筆にあたった。

3. 調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで実施してきた分布調査から遺跡地図を作成した。この地図を開発を担当する関係機間に配布し、今後計画されている開発事業にさがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その結果を受けて、開発事業との調整を図るために必要に応じ上記の調査を実施した。

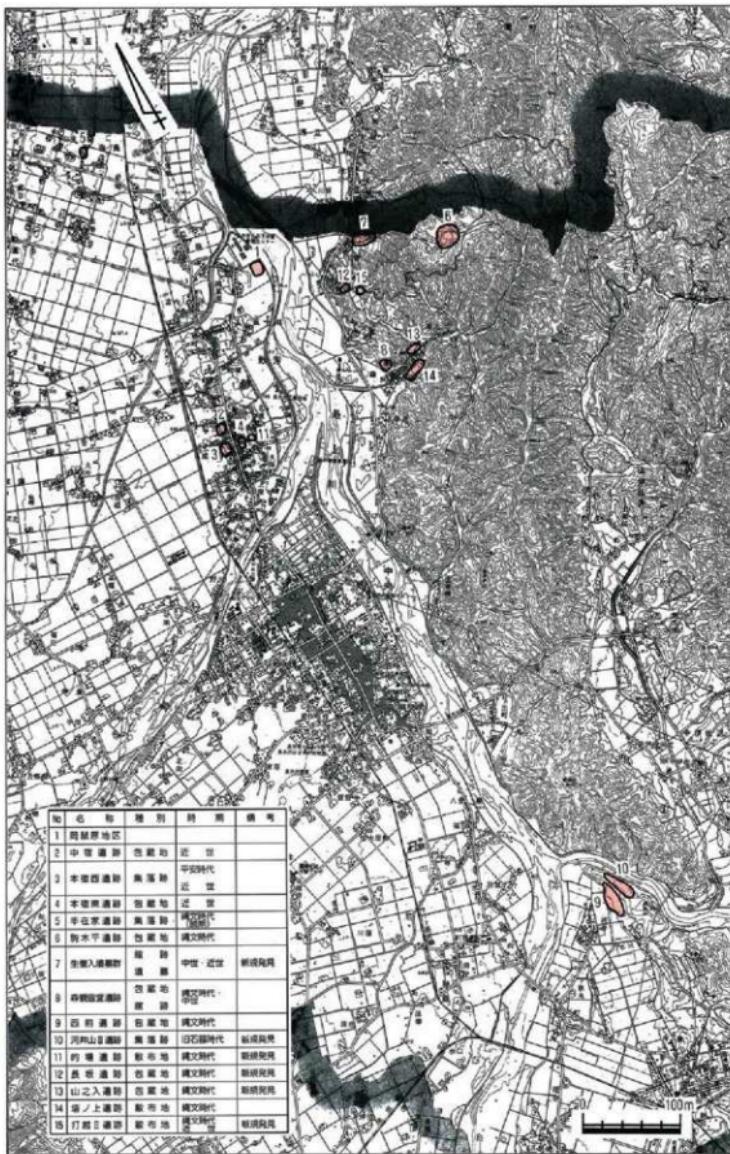
なお、ヒアリングと調査の内訳は次のとおりであり、現地調査の行程は次のとおりである。

埋蔵文化財ヒアリングおよび遺跡台帳整備に係る調査一覧表

事業種別	遺跡名	調査区分	備考
大規模造成に係わるもの	岡鼠原地区	試掘調査	
下水道整備に係るもの	中宿遺跡	試掘調査	
	本宿西遺跡	試掘調査	
	本宿東遺跡	試掘調査	
遺跡台帳整備に係るもの	半在家遺跡	試掘調査	
	駒木平遺跡	試掘調査	
	生僧入墳墓群	試掘調査 測量調査	平面図・断面図作成
	森觀音堂遺跡	試掘調査	
	西前遺跡	試掘調査	
	河井山Ⅱ遺跡	試掘調査	
	的場遺跡	表面踏査	
	長坂遺跡	表面踏査	
	山之入遺跡	表面踏査	
	塔ノ上遺跡	表面踏査	
	打越Ⅱ遺跡	表面踏査	

調査工程表

	平成7年								平成8年		
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
表面踏査	[■]										
試掘調査						[■]					
測量調査							[■]				
報告書作成								[■]	[■]	[■]	[■]



第1図 調査箇所位置図

4. 新たな遺跡の発見について

この度の調査で、新たに5箇所の遺跡を確認した（第1図調査箇所位置図）。成田地区では聞き取り調査での場遺跡から採集された石器の提供をいただき現地を確認した。現況は畠地で遺物から縄文時代の遺跡と推測される（図版1-①）。

東五十川地区では生僧入墳墓群が確認されたが詳細はⅢ章で概略を示すこととする。長坂遺跡では聞き取り調査から壺が出土したと言ふが詳細は明かでない。打越Ⅱ遺跡では踏査の結果、磨石片と陶器（図版1-④）を採集した。長坂・打越Ⅱ遺跡とも林道沿いにあり山地の平坦地に営まれた遺跡で地目は畠地・山林となっている。

森地区の山之入遺跡は、聞き取り調査で石器の提供をいただき現地を確認し、踏査したことろ碎片を採集した。森ヶ沢によって形成された河岸段丘上に位置し、現況は宅地・畠地・水田となっている。いづれの遺物も硬質の頁岩を素材としており（図版1-②）、縄文時代の遺跡と推測される。塔ノ上遺跡は平成元年度の調査で発見された遺跡であるが、このたびも踏査を行った。森が沢の河岸段丘上に位置し河床面との比高差は6mに達し、現況は宅地・畠地・山林となっているが、畠の中央部に三層の石塔が建っている。また、この石塔の西、成田地区には塔様とよばれる五層の石塔が建っており両者は最上川をはさんで対する位置にあり地名の由来にも関わりがありそうである。塔ノ上遺跡から採集された遺物は縄文土器片・石範・剝片・黒曜石塊（図版1-③）があり、縄文時代の遺跡と推測される。



的場遺跡



山之入遺跡



塔ノ上遺跡



打越Ⅱ遺跡

図版1 新規発見の遺跡・遺物

Ⅱ. 開発事業に係る発掘調査

1. 岡鼠原地区

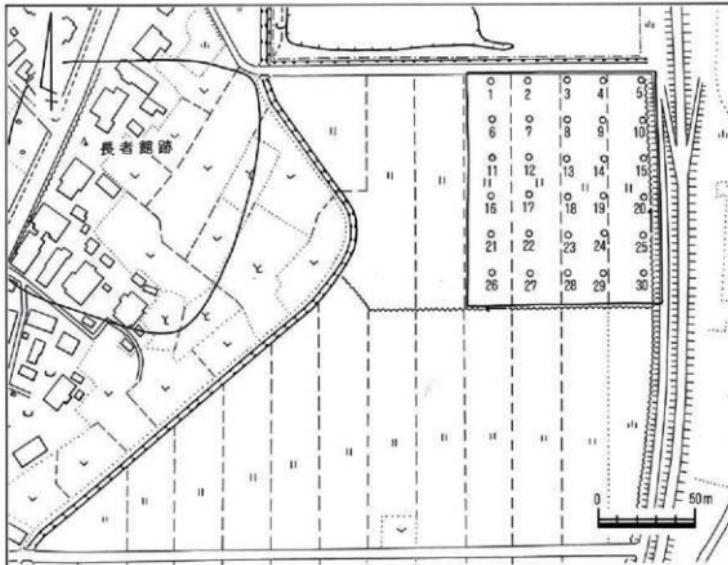
市の北部に位置する五十川の岡鼠原地区は最上川によって形成された河岸段丘上にあり、周辺には中世の館跡に関わる言伝えや蛇塚、袋など特有の地名が伝わる地域である。しかし、近年公共下水道センターの建設とともに新たな公共施設の候補地として、当地区の名が取り沙汰されている。

この度、市のリサイクルコンポストセンターの建設工事が計画され、開発面積が広範囲におよぶこと、また河岸段丘上に位置し戦国期の長者館をはじめ周辺に遺跡が点在すること等から試掘調査を実施した。

開発予定範囲に1×1mのテストピットを20m間隔に30箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

調査の結果、東西80m南北100mの範囲にわたり試掘調査を行ったが、調査区一帯は昭和40年代に基盤整備事業が行われた区域にしては極端な層位の擾乱は認められず、TP 11から漆器片が出土した。しかし遺物は砂礫層からの出土で摩滅した破片であること、周辺のテストピットからの出土遺物がなく包含層も検出されないこと、さらに調査区域の中央部を古川(旧河川)が流れていたこと等から、漆器片は旧河川によってもたらされたものと推測される。

したがって開発予定地には遺跡がおよんでいないものと考えられる。



第2図 岡鼠原地区調査概要図



調査地遠景(南から)



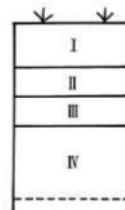
調査区遠景(東から)



TP 23 土層断面



出土遺物



TP 23 土層柱状図

図版2 岡鼠原地区

2. 中宿遺跡

フラー長井線成田駅の東約300mに位置し、一帯は商家が建ち並び古くから商業を中心に栄えた地域である。本遺跡は平成元年度の分布調査で発見され、墓地周辺から磨石片を採集したため地元の方からの聞き取り調査を基に地形状況から判断し遺跡として登録した。しかし、当地域に公共下水道の整備計画が示されたため開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で試掘調査を行った。

推定遺跡範囲に1×1mのテストピットを10~20m間隔に17箇所設定し、農作物や果樹を避けながら調査可能な箇所を地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、TP 4・5・7・8・11から陶器片が出土し、TP 7・11では他のテストピットに比べると地山層までの堆積土がきわめて厚く120cmに達することから遺構の存在が予想される。

以上のことから、平成元年度の調査では磨石片を採集しており、縄文時代の遺跡の存在を予想していたがこの度の調査では当該期に関わる遺構・遺物は検出されなかった。しかし、TP 7・11では表土層から地山層までの深さが120cmに達し、TP 11からは炭化物とともに多量の皿・碗・鉢・杯等の陶器が出土していることから近世に関わる溝や土坑の存在が予想される。なお、本調査の堆積土層を見るかぎり極端な擾乱は認められないが、出土品の一部が二次的に熱を受けており、調査区の東側にも遺跡が予想される。



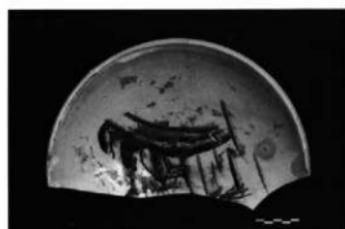
第3図 中宿遺跡概要図



遺跡近景（西南から）



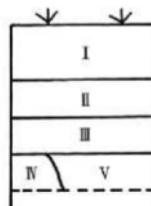
出土遺物



出土遺物



TP 5 土層断面



TP 5 土層柱状図

図版3 中宿遺跡

3. 本宿西遺跡

中宿遺跡の南側に位置する遺跡で、平成元年度の分布調査で発見された。推定される遺跡範囲は東西110m南北120mで現況は畑地・果樹園となっており、一帯から陶器片や須恵器片が採集される。この度、当地域に公共下水道の整備計画が示されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で試掘調査を行った。

推定遺跡範囲に1×1mのテストピットを5~20m間隔に18箇所設定し、農作物や果樹を避けながら調査可能な箇所を地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、TP 1・5・9・10・15・16から陶器片が出土し、TP 1・5・15ではⅢ層下の暗灰褐色土上面で遺構を検出した。また、遺物はⅢ層の灰褐色土から出土しており本層が遺物包含層と考えられる。

調査範囲に限りがあったものの、調査範囲には大規模な土層の擾乱は見られず遺構・遺物も検出され包含層を確認することができた。特にTP 1ではⅢ層の灰褐色土からⅣ層の暗灰褐色土層の境目にかけて陶器片が出土し、V層の褐色粘質土層上面で柱穴を確認している。平成元年度の調査では側溝掘りの上げ土から須恵器片を採集し、このたびもTP 18付近から須恵器片を採集しており、複数の時期の遺跡の存在が考えられる。

以上のことから、本遺跡は平安時代と近世の複合遺跡で水路をはさんだ東側まで遺跡範囲がおよんでいるものと考えられる。



第4図 本宿西遺跡概要図



遺跡近景(西から)



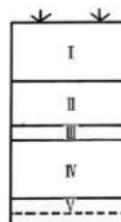
遺跡近景(北東から)



TP1 土層断面と検出遺構



出土遺物



TP1 土層柱状図

図版4 本宿西遺跡

4. 本宿東遺跡

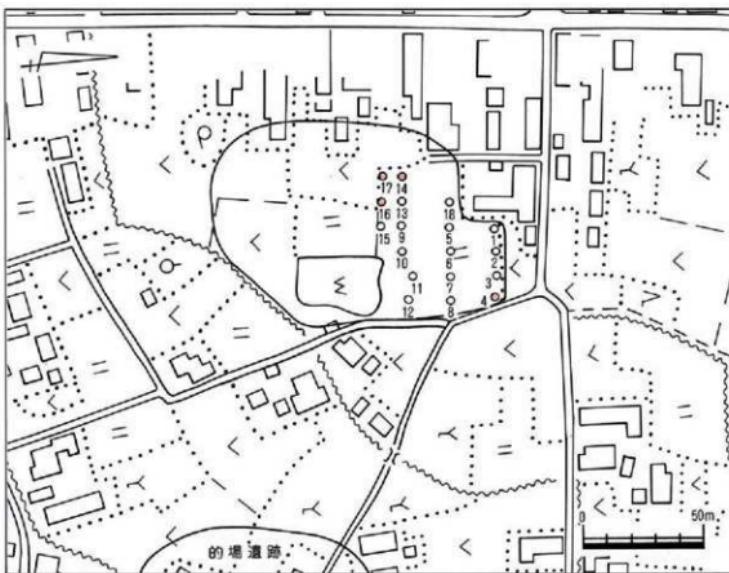
本宿西遺跡の東側に位置する。平成元年度に発見された遺跡で当初「八百刈遺跡」としたが字切図からすると「本宿東」に当たるため遺跡名を標題のとおりとする。本遺跡も公共下水道の整備計画の範囲に含まれることから、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で試掘調査を行った。

試掘区域は農作物の関係から推定遺跡範囲の北半分に留まつたが、 $1 \times 1\text{m}$ のテストピットを18箇所設定し地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたつた。

その結果、TP 4 から剝片が、TP 14・16・17 からそれぞれ陶器片が出土した。

このたびの調査から遺跡範囲の特定はむずかしいが、出土遺物の分布状況や土層の堆積状況から本遺跡の中心は当初示した遺跡範囲の西側と推定される。TP 4 から剝片が検出されたが客土層からの出土であること、また、調査区の北東側ではいずれのテストピットでも厚い客土層が確認されたことなどから、窪地や溝が存在した可能性がある。反対に西側の調査区では陶器片が出土し地山層から炭化粒子が検出され、当時の生活面と推測される。出土遺物は皿・碗・瓦質陶器で近世（江戸時代）の所産である。

なお、聞き取り調査から本遺跡の南東側から石器が採集されており縄文時代の遺跡の存在を考えられ、TP 4 付近の窪地や溝はこれらの遺跡の土砂を用いて埋め立てを行った可能性がある。



第5図 本宿東遺跡概要図



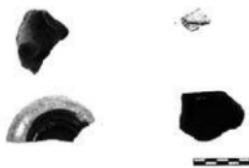
遺跡近景(北東から)



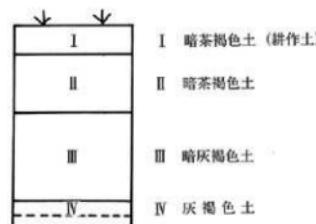
遺跡近景(南西から)



TP13 土層断面



出土遺物



TP13 土層柱状図

図版5 本宿東遺跡

III 遺跡台帳整備に係る発掘調査

5. 半在家 遺跡

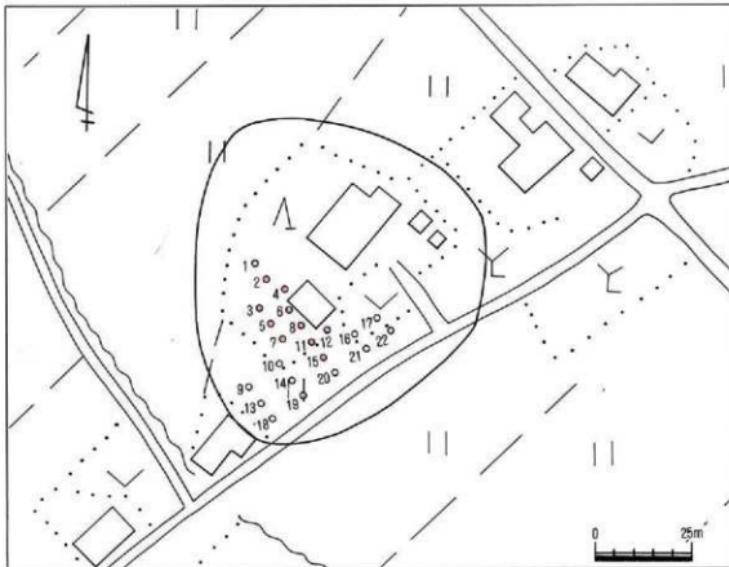
長井市の北部白兎地区、西山山ろくと最上川の中間地点の平野部に位置する遺跡である。本遺跡は平成元年度の分布調査で見つかったもので、民家周辺の畑地から土器や石器が採集されたが、数年前地検者の方が浄化槽埋設のため深掘りを行ったところ多数の土器や石器が出土している。

このたびは、遺跡台帳整備の目的から試掘調査を実施した。

推定される遺跡範囲で調査可能な区域に 1×1 m のテストピットを 5~20m 間隔に 22箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、TP 2・4~8・11・12・15から縄文土器片や剝片が出土し、TP 3からは石組の遺構が検出された。遺物の出土状況を観察すると道路沿いのテストピットは地山層までの堆積土が深いのに対し、北よりのテストピットでは堆積土が浅い状況である。周辺一帯は昭和40年代に土地改良事業が行われたが、調査区域に限って見れば極端な土層の攪乱は認められなかった。また、調査区の西側と北側が高台になっていること、浄化槽埋設のため深掘りで遺物が多数出土した地点は家屋の北側にあたることから、遺跡の範囲は高台を含め北側にのびる可能性がある。

したがって、本遺跡は祭祀に係わる石器や出土土器から縄文時代晚期の集落跡と考えられる。



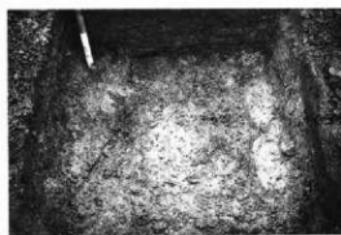
第6図 半在家遺跡概要図



遺跡近景(南東から)



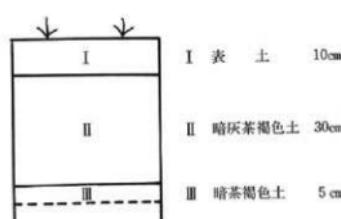
遺跡近景(南から)



TP 3 遺構検出状況



TP 4 土層断面



TP 4 土層柱状図

図版6 半在家遺跡

遺物について

ここでは試掘調査で得たものと以前出土した遺物をあわせて提示するが、前者の土器は摩滅が著し小破片であるのに対し、後者の土器は精製土器が多く遺存状況も良く石器や石製品も見られる。

【土 器】

第1群土器（第7図、図版7）

いずれも小破片であるが、精製土器の平行線化した磨消繩文から大洞C2式に併行する一群である。

深鉢（第7図1・2）

口唇に刻目文が施され、口縁部は外反するが文様は見られない。両者は同一個体である。

鉢（第7図3～7）

3は口唇が細かい波状を呈し、口縁部は2条の沈線で区画され羊歯状文を直線で表現したような沈線が施され口縁部文様体が形成される。4は口唇に間隔をおいた刻目が施され「く」字状に外反した口縁部には3状の沈線が巡る。5から7は口縁に太めの沈線が巡り口唇に指頭大の凹文が施される。

浅鉢（第7図8～10）

口唇に三又状の沈刻の名残の装飾が見られ、器形はやや内湾し体部の磨消繩文は直線化の傾向にある。

皿（第7図11）

口唇に三又状の沈刻の名残の装飾が見られ、直線化した磨消繩文が施される。

壺（第7図12）

外反ぎみに立ち上がる口縁部の破片で、下端部に斜繩文が施される。

第2群土器（第7図、図版7・8）

平行沈線と隆線で構成される工字文が施される土器で大洞A式に併行する土器である。

壺（第7図13・28）

胴部上半から口縁下位にかけて平行沈線と隆線で構成された入組工字文が施され、底部には4個の瘤が付く。拓影図と実測図は同一個体である。

第3群土器（第7図、図版7）

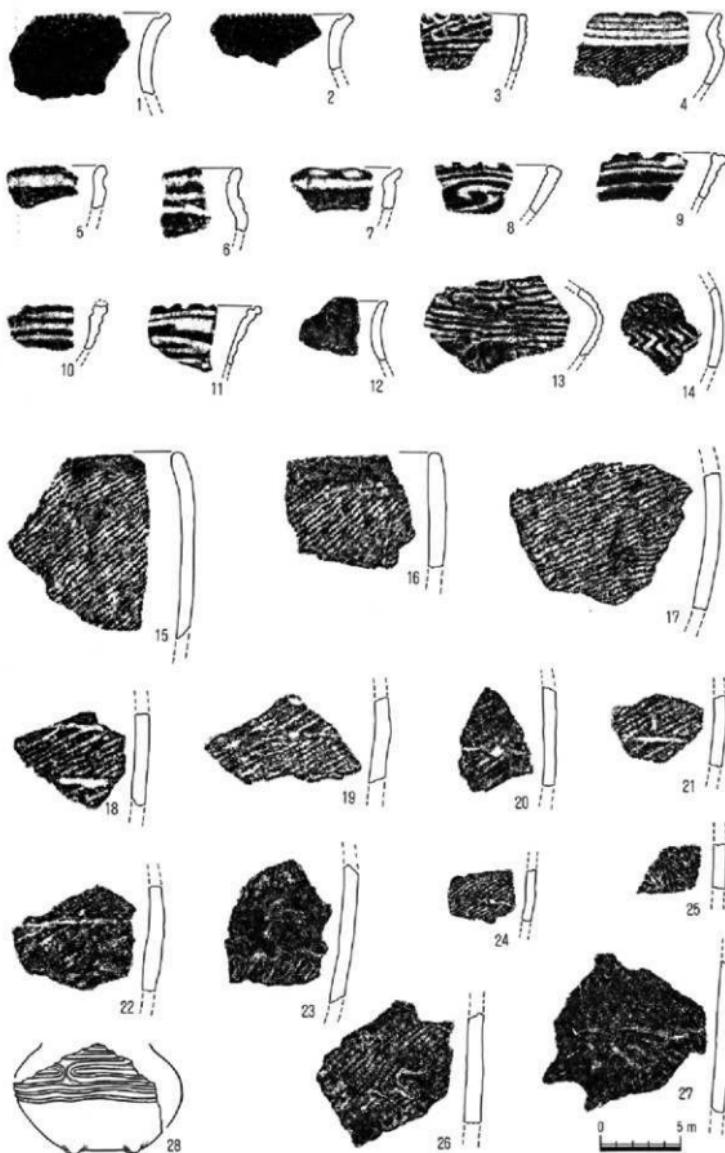
1・2群土器に伴出する土器を一括して本群とした。

深鉢（第7図15～27）

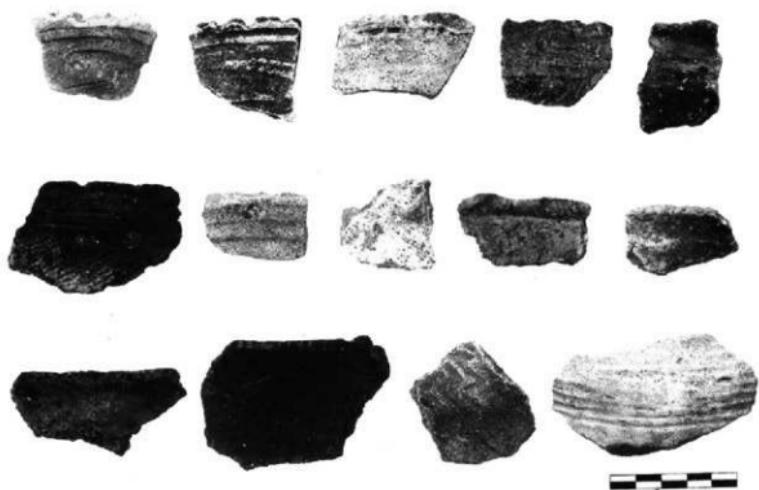
厚手の器壁をもち体部に斜繩文を施し、結束部が綾繩文となる。14は体部に山形の押型文が施される土器である。山形部に空間があり深鉢か鉢の体部破片である。25は横歯状の沈線が施される。

【石 器】（図版8）

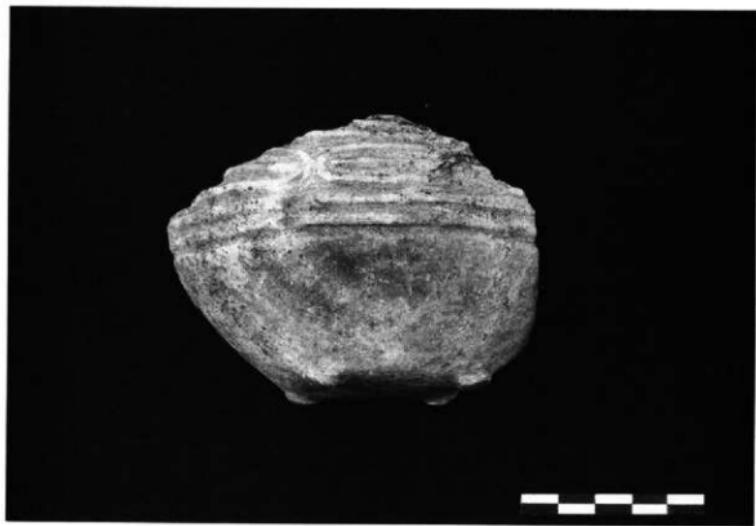
打製石器では抉入搔器、削器、打製石斧、円盤状石製品があり、剥片類をふくめほとんどが頁岩を素材としたものであるが、黒曜石の剥片も見られる。磨製石器は石剣が出土した。



第7図 半在 situ 遺跡土器実測図・拓影図

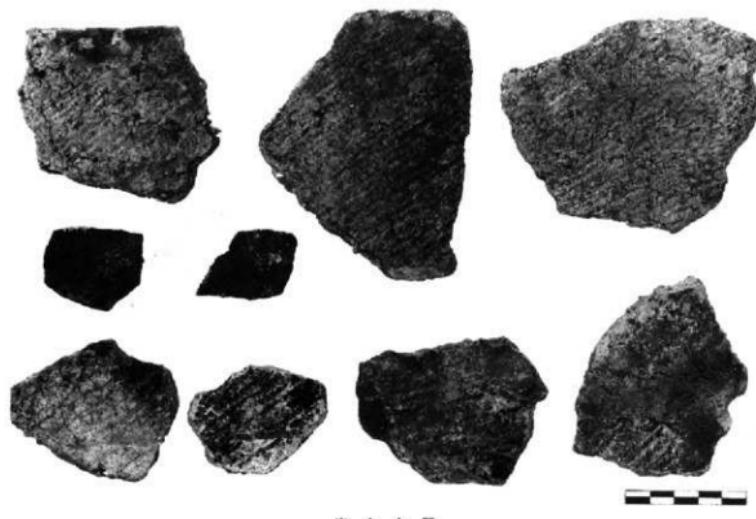


出土土器



出土土器

圖版7 半在家遺跡



出土土器



出土石器

圖版8 半在家遺跡

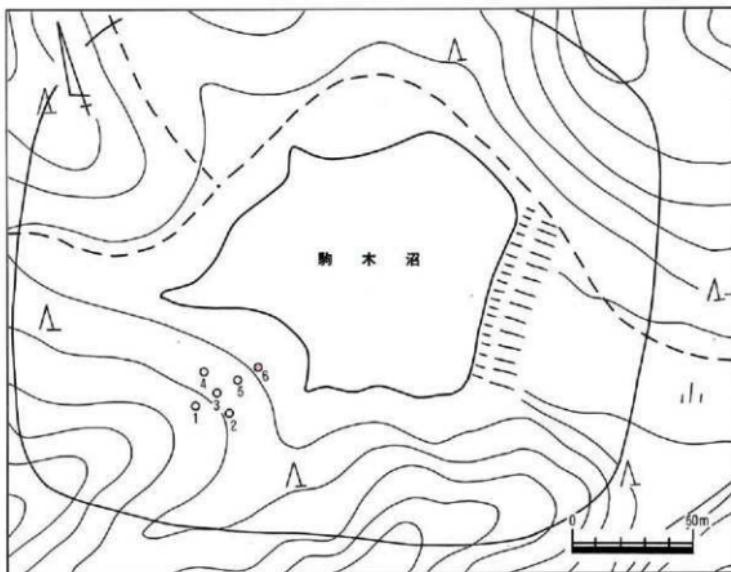
6. 駒木平遺跡

長井市街地の北部に位置する駒木平遺跡は、平成元年度の分布調査で確認された遺跡である。東五十川地区から大石地区に至る林道沿いの駒木沼は戦中から戦後にかけて造成された灌漑用の沼で、当時堰堤工事のため周辺の丘陵から土砂を採集したさい、石器が採集されたという。昭和30年代まで人家が存在したため堰堤の東側には水田跡も見られるが、現在は水辺を活用したキャンプ場となり東屋も建っている。

この度は、遺跡台帳整備の目的から試掘調査を実施した。

聞き取り調査によると、駒木沼の南から西側にかけて石器が出土した可能性が強いため、地目や立地条件を考慮して沼の南西側の丘陵に 1×1 mのテストピットを10m間隔に6箇所設定し地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査の結果、遺構・遺物は検出されなかったが、土層の堆積に擾乱は見られず安定した層序が確認された。遺跡範囲の特定には至らなかったが、遺跡の立地する条件も備えていることから今後の調査に期待したい。



第8図 駒木平遺跡概要図



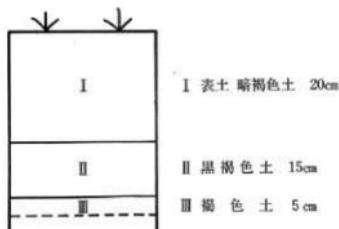
調査区遠景(東から)



調査区近景(南から)



TP 5 土層断面



図版9 駒木平遺跡

7. 生僧入墳墓群

市街地の北部、国道287号線沿いの白鷹町との境界に生僧地区がある。最上川右岸の河岸段丘と通称東山の麓に位置する本地区には、高僧「宥日上人」に関する言伝えが数多く残っている。宥日上人は応永3年(1396)に当地区で生まれ文明4年(1473)に常楽院(長井市栄町)で入寂したという。母親「おかま」は奉公先で身ごもったため、観音堂に願をかけて生まれたのが宥日であるが、ある日川辺に咲く椿の花を探ろうとし足を滑らせて川に落ちて死んだため当地区では現在でも椿は栽培しないという。また、宥日は書画に堪能であり祈禱でも名を揚げたため現在も画像や託宣が伝わっているほか、宥日にかかる生湯の井戸・入寂の井戸の水を3月13日に汲み取り屋根にかけると火災から逃れられるという。

本遺跡はこのたびの分布調査で確認されたが、以前から観音堂の裏山に塚状の遺構の存在が知られていたため、遺跡台帳整備の目的から範囲と性格を明らかにするため地形測量調査と試掘調査を実施した。

遺構の所在を明らかにするため生僧観音堂の裏山を中心に踏査を行ったところ、尾根とお堂の中間地点で階段状の遺構(1調査区)とテラス状の平坦地(2調査区)を確認した(第10図)ため、遺跡の立地と周辺地形を把握するため平面と断面の測量調査を行い概要図の作成にあたった(第10・11図)。また、礎石等の埋納が予想されることから任意の試掘坑を設定し遺構・遺物の検出にあたった。



第9図 生僧入墳墓群概要図

調査の結果、断面図（第11図）で示したように遺構の検出された断面a-a'、c₁～c₃と未検出のb-b'ラインでは明らかに相違が認められる。また、2調査区で試掘を行ったところ長径15～30cmの偏平な川原石が平面的な集まりをもって検出された（図版11）。さらにそれらを取り除き精査すると一辺が約50cmの方形を呈するプランを確認し（図版12上）、精査面から白い骨片を検出した（図版12下）。1調査区でもボーリングステッキにより偏平疊の存在が確認されたが、2調査区の精査による骨片検出で掘り下げを中止し詳細は今後の調査に委ねることとした。

以上のことから、本遺跡の遺構は埋納骨を偏平疊で覆った墳墓と推定される。しかし、2調査区のテラス状の平坦地が築かれた時期や1調査区の階段状遺構が築かれた時期と墳墓がつくられた時期を同一視できない。観音堂が位置する山裾は「左右に丘陵をもち前面に流水を臨む」墳墓立地の理想的地形に當まれているが、参道の両側は地区の共同墓地となっており、相対するように帶状の平坦地が段々畠状に広がりをみせている。このような形状は当地域の中世城館遺跡の遺構配置に近似しており、山腹にある平坦地や階段状遺構も城館遺跡に含まれる可能性がある。また、観音堂の南側には生僧寺があったといわれ、宝暦7年（1757）の大雨で山崩れのため崩壊し、その後宝暦11年に観音堂が建ったという。墳墓群の造営年代は今後の調査に委ねなければならないが、高僧宥日に関わる伝承や周辺一帯が現在まで墓域となっていること、さらに参道入口付近の字名が仏供田と呼ばれており、生僧地区は古来から聖域として崇められた地域である。



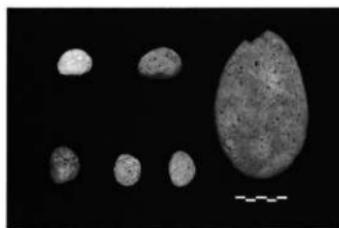
遺跡近景（南東から）



2調査区から

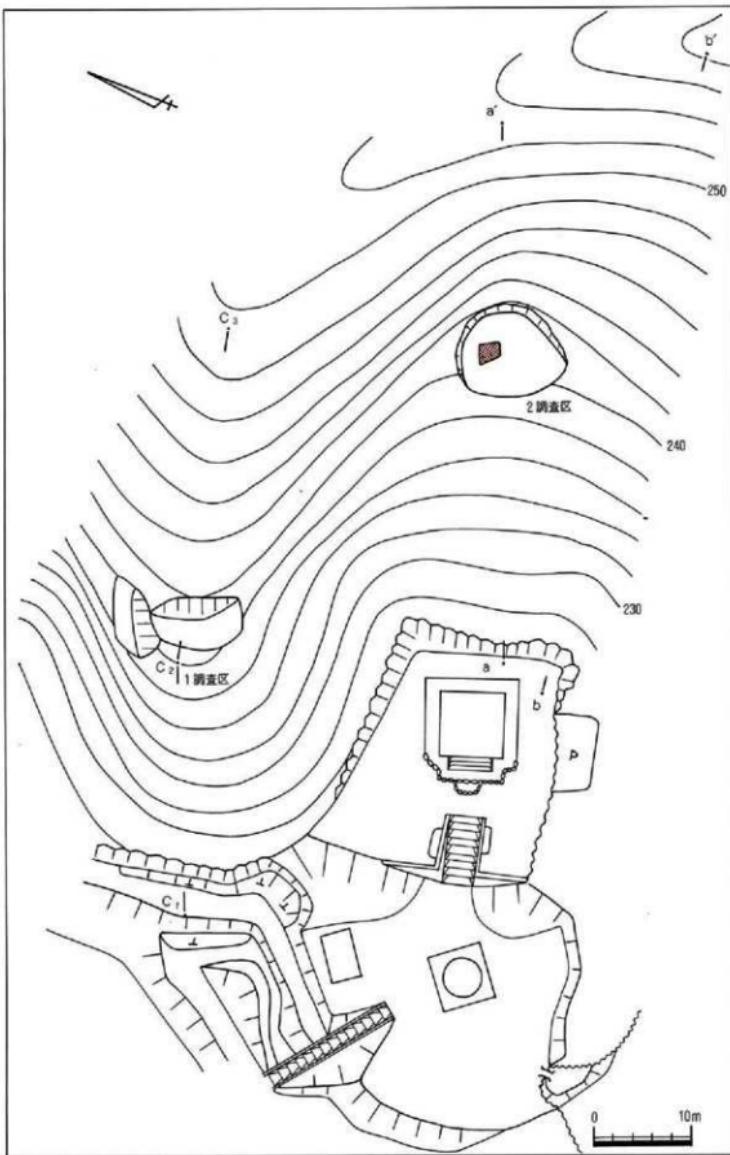


調査風景（2調査区）

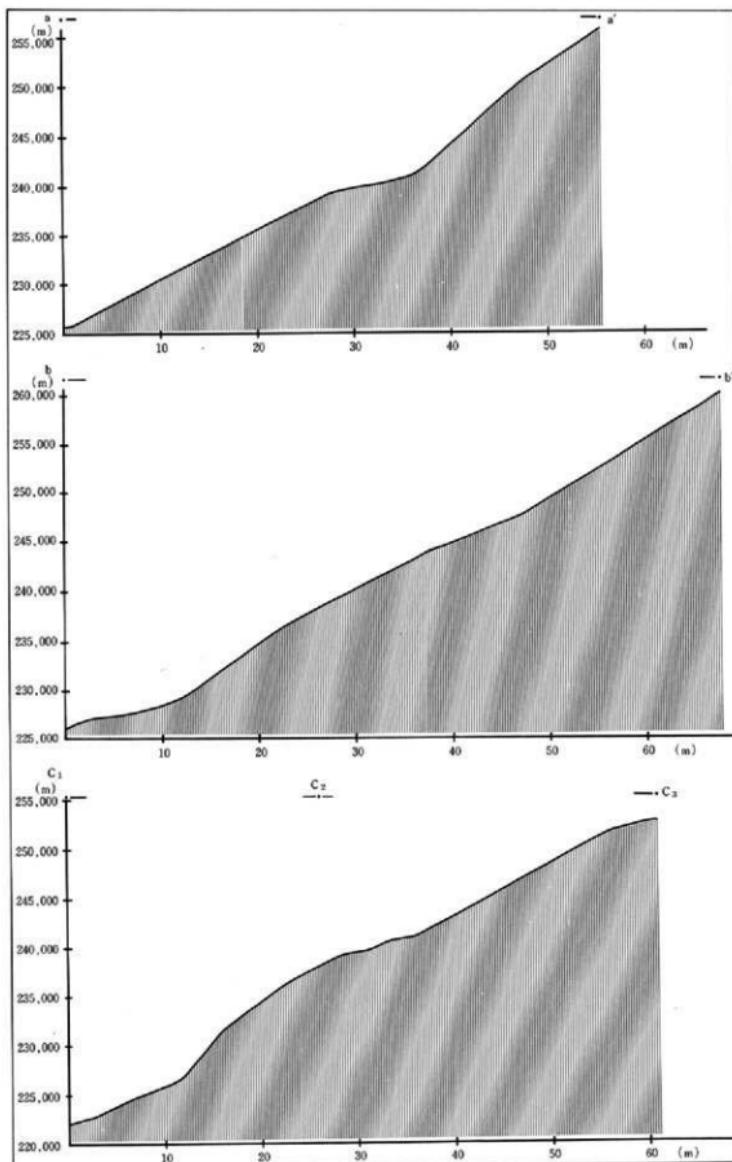


出土した砾

図版10 生僧入墳墓群



第10図 生倉入墳墓群調査概要図



第11図 生僧入墳墓群調査概要図



遺構検出状況



遺構検出状況

図版11 生僧入墳墓群



遺構検出状況



遺構検出状況

図版12 生僧入墳墓群

8. 森觀音堂遺跡

最上川と置賜野川の合流地点の東、森地区に位置する遺跡で、森ヶ沢によって形成された河岸段丘上に集落が点在し、畠地から遺物が採集される。本遺跡は森地区の中央北部の森觀音堂境内前にあり、平成元年度の分布調査で発見された。

この度の調査は、遺跡台帳整備を目的とした調査である。前回の分布調査でお堂の東南部畠地から遺物を探集しているが、現在周辺一帯は杉の植林が行われていたため調査範囲は限定されたものとなったが、お堂西側に 1×1 m のテストピットを 5 m 間隔で 6 箇所設定し地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。また、参道の両側は段々畠状の平坦地が各所に見られることから等高線の間隔の緩い区域を中心に表面踏査を行った。

調査の結果、TP 1 から剥片と磨石が出土した。また、踏査では現在墓地が営まれている平坦地一帯と、TP 6 の南側斜面に沿って帯状の平坦地が段々畠状の広がりを確認した。さらに調査区西端には幅約 4 m 高さ約 2 m の土壘が台地に沿って約 30 m にわたり築かれている。

以上のことから、調査範囲が限られており遺跡の時期と範囲を特定するにはいたっていないが、お堂南側の平坦地には縄文時代の遺跡の存在が考えられる。大きな擾乱もなく層序も安定しており遺存状況は良好と推定される。また、墓地がある平坦地や参道沿いの帯状の平坦地は形状や配置・構築状況、土壘の存在から中世城館遺跡の曲輪と帶曲輪と考えられる。

したがって、本遺跡は縄文時代と戦国期の複合遺跡であり、大規模な範囲が予想される。



第12図 森觀音堂遺跡概要図



遺跡近景(西から)



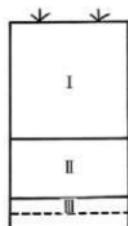
遺跡近景(北から)



TP 4 土層断面



出土遺物



I 表土 暗茶色土 40cm

II 黒褐色土 20cm

III 灰褐色土 5cm

TP 4 土層柱状図

図版13 森観暗堂遺跡

9. 河井山遺跡群

1) 河井山遺跡群について

長井市南部の河井地区は最上川と白川の合流地点の南に位置し、両河川によって形成された河岸段丘上に集落が散在する。河井山は同地区の東端、最上川左岸に沿って連なり長さ南北約1km幅は100~300mの規模で最も高いところで標高253mを測る。以前、河井の集落は丘陵の西側に形成されていたが、耕地を求めて西へと開かれ現在の集落形態になったという。現在も山裾に不動尊堂が建っており当時の名残を見ることができる。

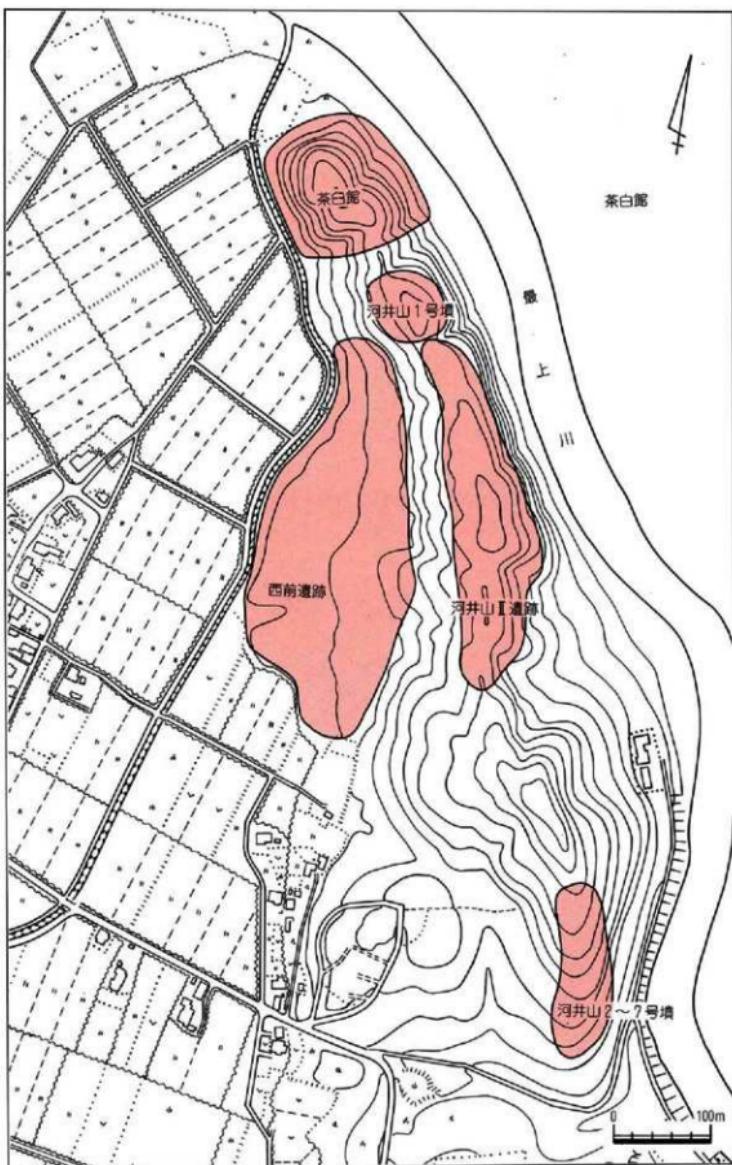
河井山で最初に発見された遺跡は茶臼館である。丘陵北端に位置し、東西80m南北120mの範囲をもち2~3重の帯曲輪で囲まれた中世の山館で、平成3年度に館の概略を示す縄張図を作成した。

河井山古墳群は7基の円墳が山頂に点在し、平成元年~3年にかけて國學院大學考古学資料館が発掘調査を実施した。丘陵北部の1号墳、南部の2~5号墳を調査し大型のもので直径20m小型の古墳で10m前後の規模をもつ円墳である。割竹型木棺直葬の形態をもち出土遺物から5世紀末から6世紀初頭の古墳である。また、1号墳覆土や周辺から旧石器時代の遺物が、3号墳覆土から縄文時代の遺物が多数出土した。

以上のように河井山には旧石器時代・縄文時代・古墳時代・戦国時代の遺跡が眠っており、古くから人々に生活の場を提供してきた由緒ある区域である。



図版14 河井山遺跡群遠景



第13図 河井山遺跡群概要図

2) 西前遺跡

河井山中央部の西側一帯に位置し、西に向けて緩やかな等高線の張り出しをもち河岸段丘に沿って旧河川を改良した水路に囲まれた区域である。本遺跡は平成3年度の分布調査で試掘調査を行ったさい、土器片と剝片を検出しているが遺跡範囲の特定にはいたっていない。

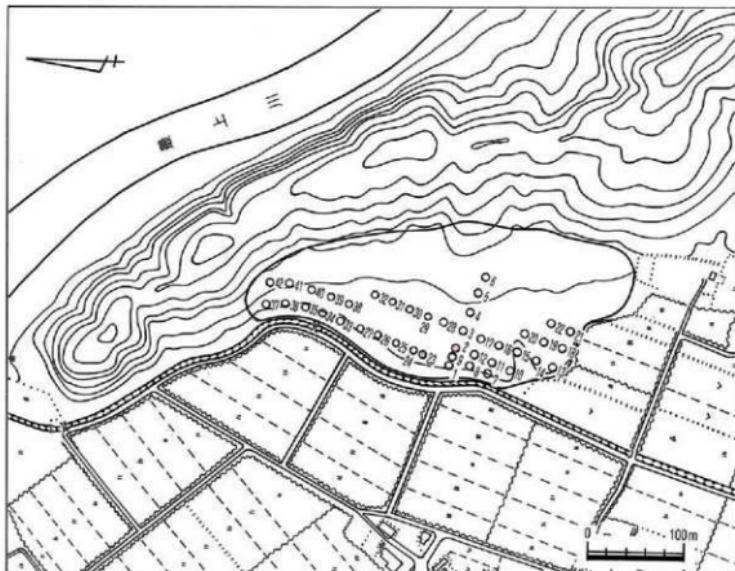
このたびは、遺跡台帳整備を目的とした調査である。

山林の調査可能な区域に $1 \times 1\text{ m}$ のテストピットを20~40m間隔に42箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあつた。

調査の結果、周辺一帯は湿地が多くほとんどのテストピットは30cmぐらい掘り下げるところにみまわれ、調査に困難をきたしたがTP 2・23から縄文土器片と磨石片を検出した。特に山際に近づくにしたがって湧水の量は著しくなるため、調査区域を遺跡西側に限定せざるを得なかった。

本調査でも前回の試掘調査と同じ黒褐色土層から遺物を検出しておらず、本層が遺物包含層と仮定すれば遺跡範囲も推定可能であるが、おおかたのテストピットから黒褐色土が検出されているにもかかわらず遺物・遺構の数量が少なすぎるため、遺跡の中心区域は別の場所に存在する可能性もある。

遺跡から正確な情報を引き出すには乾燥した時期をねらって、山裾を中心に再度調査を試みる必要がある。



第14図 西前遺跡概要図



遺跡遠景(西から)



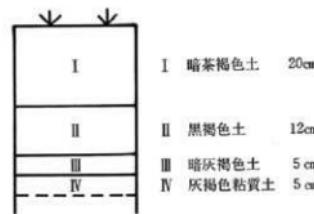
調査区近景(南から)



TP 23 土層断面



出土遺物



TP 23' 土層柱状図

図版15 西前遺跡

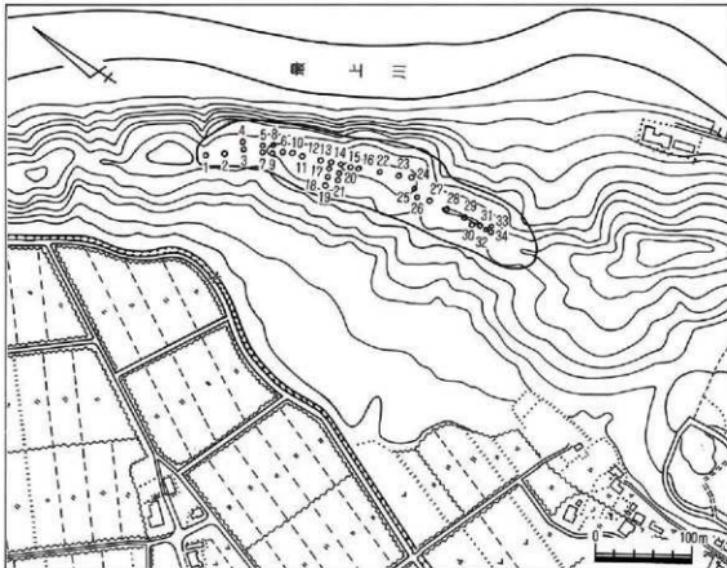
3) 河井山Ⅱ遺跡

河井山山頂の尾根上に位置する遺跡である。1号墳の調査で旧石器時代の遺跡の存在が明らかになったが遺跡の広がりが不明であったため、尾根沿いに試掘調査を行い遺跡の性格と範囲の確認にあたった遺跡台帳整備を目的とした調査である。

山頂部を中心に 1×1 mのテストピットを5~20m間隔に34箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあった。

調査の結果、TP6からナイフ形石器、TP4・20・26・31・34からは剝片がそれぞれ出土し、TP4では拳大の川原石が密集して検出されたことから礫群と考えられる。出土遺物はいづれも粘土質の地山層から出土したため、遺物・遺構とも旧石器時代の所産と考えられる。また、土層の堆積状況も全体的に擾乱は認められず安定しており遺跡の遺存状態は良好である。一般に旧石器時代の遺跡では遺物・遺構が検出される割合は遺跡面積からすると極めて小さいことから、河井山尾根沿いには大規模な旧石器時代の遺跡が存在するものと考えられ、将来的には尾根全域にまで遺跡範囲が広がる可能性があるが、この度の調査をもって本区域を河井山Ⅱ遺跡として新規発見の遺跡とする。

ナイフ形石器は節理面の影響で器面に凹凸が見られ先端部は欠損するが、器中央部に2条の稜線をもち基部から左側辺にかけてプランティングが施される。礫群の存在から関東地方とのかかわりが想定される。



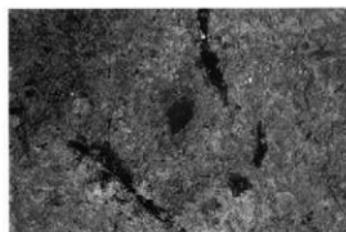
第15図 河井山Ⅱ遺跡概要図



遺跡遠景



調査区近景



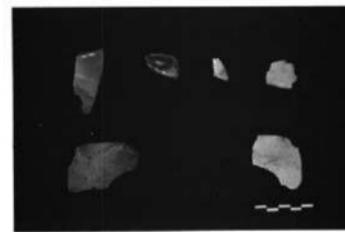
遺物出土状況



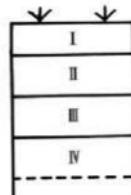
出土遺物(表)



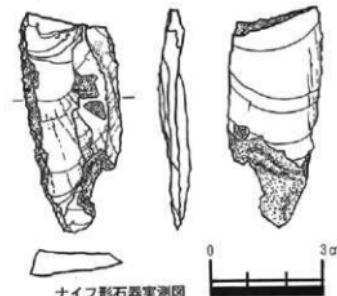
TP 28 土層断面



出土遺物(裏)



TP 28 土層柱状図



図版16 河井山Ⅱ遺跡

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	本宿西遺跡の調査、半在家遺跡の調査、生僧入墳墓群の調査、河井山Ⅱ遺跡の調査他							
巻次								
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993 山形県長井市ままの上5番1号 TEL 0238-84-2111							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 <small>遺跡番号 (抜削用参考)</small>	北緯 °°'	東經 °°'	調査機関	調査 面積	調査原因	
本宿西	山形県長井市成田字本宿西	6209	37	38度 07分 30秒	140度 02分 27秒	1995.12.05 1995.12.05	18m ²	公共下水道 整備に伴う 試掘調査
半在家	山形県長井市白兎字半在家	6209	17	38度 09分 18秒	140度 02分 33秒	1995.11.08 1995.11.08	18m ²	遺跡台帳整 備に伴う試 掘調査
生僧入	山形県長井市東五十川字生僧入	6209	新規	38度 08分 06秒	140度 04分 02秒	1995.11.30 1995.12.01	20m ²	遺跡台帳整 備に伴う試 掘調査
河井山Ⅱ	山形県長井市河井字西前・東前	6209	新規	38度 04分 17秒	140度 03分 27秒	1995.12.11 1995.12.12	34m ²	遺跡台帳整 備に伴う試 掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
本宿西	集落跡	平安 近世	柱穴	須恵器 陶器				
半在家	集落跡	縄文 晚期	石組遺構	縄文土器 打製石斧他				
生僧入	墳墓	近世	墓坑					
河井山Ⅱ	集落跡	旧石器	礫群	ナイフ形石器 剝片				

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書 第13集
市内遺跡発掘調査報告書(4)

平成8年3月11日 印刷

平成8年3月29日 発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市ままの上5番1号
TEL (0238) 84-2111

印刷 印刷の芳文社
山形県長井市十日町一丁目9番2-1号
TEL (0238) 84-2148
